

『嘆きの中での信頼！』 詩篇116篇1～9節 2016.10.2(聖日礼拝説教より)

『…わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。』ヨハネ8章12節
◆『私は救いの杯をかかげ…(13節)』は、教会40周年の時、故重平師が召される直前に与えられた御言葉。末期ガンに侵され苦しむ中、「この世(私)を救い給う神に乾杯！」と人生最期の渾身の讃美(3週間後に召天)！本当の讃美は嘆きの中にこそあるのかも…。

①詩篇 116 篇の記者は「私の嘆き祈る声を聞かれる主を私は愛する(1節)」と告白！何に嘆き苦しんだ？『死の綱が絡みつき、よみの恐怖が襲い…(3節)』。死そのものでなく、病や障害、試練や災い、何より罪の苦しみがまとわりつく。

「よみ」とは「神から切り離された世界」のこと。神が分からない、信じられない、賛美することもない滅びの世界…詩人は、その中で「主の御名を呼び求めた(4節)」！人は神に祈るもの！創り主は、神を忘れて自己中心に生きている人間に、あえて苦難を与え、祈りに導こうとされているのではないか？「苦しい時の神頼み」と言うが、私たちが神を求めているのではなく、実は神が、罪故に迷い、この世の悪に弄ばれている私たちを救おうと必死なのだ！

◆ブルナーは「祈りは応答だ！」と言う。私たちは神に呼ばれるからこそ振り返る(イザヤ 43:1)！ある人にとって祈りは独り言「神様あ！…あ～いないや…」。ある人は対話的「ね～神さまあ～早くしてね！いつまで待たせるの？聞いてる？…」。そこに平安も確信もない…神の呼びかけを聞いていないからである！『わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません(ヨハネ 8:11)』と聞けばこそ「感謝です！共にいて私を守ってください！」と応答できるもの。

②御声に応答する者は確かな救いを実感する！『魂を死から、目を涙から、足をつまずきから救い出された(8節)』。罪の滅びから救われ、豊かな慰めと罪に打ち勝つ力をいただけた！◆星野富弘さんは、一瞬の事故で四肢麻痺となり、悔しさと絶望の中で、キリストの言葉を聴く『すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい(マタイ 11:28)』。その御声を通してキリストと出会い、その方の許に重荷を降ろし、自己憐憫から抜け出し、口に筆をくわえて絵を描き始める。CSルイは言う『神は楽しみにおいて囁き、良心を通して語る。しかし苦難においては激しく呼びかける。苦難は聞かなくなった世界を呼び覚ます神のメガホンだ』と。神の愛が祈りの始まり。

★今週、嘆きの中でこそ聖書に聴き、神の呼びかけに応答し、その愛と確かな救いを実感しよう！神の救いに乾杯！